

城の恩人たちの肖像画

市川量造（1844-1908）と小林有也（1855-1914）の2人の松本市民は、松本城を破壊の危機から救うために、精力的に活動した。明治時代（1868-1912）、近代化・西洋化が進む中、彼らは松本城を封建時代の遺物としてではなく、日本の歴史の一部として捉えたのである。

市川量造(1844-1908)

市川量造（左）は、現在の松本市下横田に名主の家に生まれた。1871年に行政官に任命され、翌年には地方新聞を創刊した。1872年10月、市川は松本城が競売にかけられ、間もなく取り壊されることを知った。これを防ぐ決心をした彼は、自紙に陳情し、城内で展覧会を開くことを願い出た。この展覧会を通じて、松本城の保存のための資金と民衆の支持を集めた。

小林有也(1855-1914)

小林有也（右）は、現在の大阪府南西部の武士の家に生まれた。東京で物理学を学んだ後、1885年、長野県の県立中学校の初代校長として松本に赴任してきた。

20世紀に入ると、松本城の荒廃が顕著になり、小林は行動を起こすことになる。1901年、小林は「松本天守保存会」を設立し、全国で募金活動を展開した。その結果、当時としては巨額の寄付金2万円が集まり、松本城の大修復を実現することができた。